第５回研究大会

基調講演「生活科における動物飼育」

田村　学

文部科学省で教科調査官をしております田村です．生活科と総合的な学習の時間を担当しておりまして，私の前任は，この会とも関係の深い嶋野道弘先生です．調査官になる前は，新潟県の学校現場で教員として教育実践をしていました．新潟県上越市の大手町小学校や，上越教育大学附属小学校で，生活科や総合的な学習の時間などの実践をして参りました．今日は，このような機会をいただいてたいへん嬉しく思っています．

最初にお礼を申し上げたいと思います．学校での動物飼育に関しては，生活科の中で取り上げることが多くなります．しかし，小学校の先生方には専門的な知識が十分でないこともありまして，うまく飼育活動が行われていない場合も出てくることと思います．そんな中で，獣医師の皆様方からは強力なサポートをいただいており，学校現場の先生方はずいぶん助かっているのではないかと思います．たいへんありがたく思っています．

また，今日のような獣医師さんが専門的なことを研究される学会の中に，学校飼育動物に関わる市民講座を開催し，学校の先生方も参加できる場が用意されていることに感動いたしました．これからの学校教育においては，子どもたちを育て守っていくことを，学校の教師だけで行っていく時代ではないということは明らかでしょう．多くの地域の皆さんと多くの大人の力によって，子どもたちを支えていかなければいけません．そういったときに，こういう場があるということは非常に意味深いものだと思います．

自分が教育実践をしてきた中で，どのような動物飼育をしてきたかと振り返ってみたところ，私も子どもたちといろいろな生きものを飼ってきました．ウサギを飼ったことがあります．それから，ヒツジを飼ったこともありました．ヤギも飼いました．ヤギのうんちはチョコボールみたいだとその時初めてわかりました．周りは黒いんですが，中を割るとやはり草を食べているからか，緑っぽかったのを覚えています．ロバを飼ったこともあります．それからウシを飼ったこともあります．生活科や総合的な学習の時間の中で，子どもたちが動物とふれあうことによって，子どもたちと命の大切さを考えてきたつもりでおります．

動物飼育の活動の中では，子どもたちが学ぶ機会もたくさんありましたが，教師である私も多くのことを学ぶ機会がありました．いろいろな人と出会うチャンスがありました．獣医師の皆様にお

世話になることや，地域で活動している方々に出会う機会もありました．生きものを良い環境で育てるのは，担任の力だけでは難しいです．そんなときに，地域にいらっしゃる獣医師さんたちに，飼育のノウハウを教えていただくことも多く，私自身のネットワークも広がっていきました．

そのような私自身の体験をベースにしながら，今日は話を進めていこうと思います．学校の先生方も多いということですので，一つは生活科の視点から，もう一つは，教育活動という面から，さらに三つ目は，学習指導要領の改訂が目前に迫って参りましたので，その改訂の部分を視野に入れながら話をしていきたいと思います．

最初に，学習指導要領の改訂について情報提供したいと思います．早ければ今年度中に学習指導要領の改訂が行われる，ということが言われています．つまり，平成19年の３月までに新しい学習指導要領ができる可能性があるということになるかと思います．これまでのスケジュールですと学習指導要領ができて少し経ってから，解説書ができ，２年間の移行期間を経て全面実施になる場合が多いようです．つまり平成22年くらいから新しい指導要領が全面実施になるというスケジュールが考えられると思います．

では，生活科という教科について少し考えてみたいと思います．生活科の中では，子どもたちは学校探検をしたり，近くの公園や山で遊んだり，あるいは植物を育ててその様子を観察したり，野菜を作ってそれを食べたり，あるいは生きものを飼ったり，ドングリを拾ってきて，それを用いて自分たちで遊びをつくったりします．遊びについても個人でするだけではなくて，みんなで協力して遊びをつくったり，ルールをつくったりもしま

す．家庭生活に関することも学習をして，家庭の中ではどんな仕事ができるのか，自分の家族における役割はなんだろう，などという学習もしていきます．それだけではなくて，これまで自分がどんな成長をしてきたのかという自分の成長に関する学習もしています．もちろん，活動的なものが多いのですが，子どもたちは表現活動をしたり，友だちと話し合いをしたり，意見交換をしたりしながら学習活動を進めていきます．

こういった生活科という教科には，三つの特質があります．一つは，活動や体験を通して学ぶ教科であるということです．この活動や体験が，生活科という教科の特質の中核に位置しています．そして二つ目は，自分の生活や暮らし，あるいは地域といったものを対象に学んでいきます．三つ目は，対象を常に自分との関わりの中で学んでいくということです．たとえばアサガオというものを，客観的に自分と切り離してみていくということではなくて，むしろ自分とアサガオを非常に近いものとしてつないでいって，私のアサガオとして育てていくのです．場合によっては，アサガオに名前を付けたりして育てていく．動物飼育でも一緒です．客観的に動物を捉えて，学習の対象としてだけで見ていくのではなくて，その生きものに心を寄せて，名前を付けたりして，自分たちの仲間，あるいは家族として接していくというところが，生活科の特質です．

このところは，今回のテーマでもある「感性を揺さぶる」というところと非常に大きな接点があるのではないかと思います．まさに子どもたちの感性的な捉え，ある意味主観的な捉えですけれども，それが低学年期の子どもたちの発達のためには非常に大事なことであると考えています．こうしたことが，将来の科学的な視点を培うために必要な学びであるということが言えるのだと思います．

生活科の内容の中には，先ほど鳩貝先生からもお話しがありましたように，動物飼育に関することがあります．生活科の内容としては８つあり，そのうちの内容の(7)というところに，動物飼育に関して表記されていますが，実は，この内容の(7)についてだけが，２学年に渡って扱うことになっています．したがって，この(7)の内容だけは，他の内容に比べて重視されているということになります．その中に，今までご紹介があったような，あるいはこれからご紹介するような子どもたちの姿が出てくることになります．

さて，お手元の抄録の６ページをお開きください．これは長野県の子どもたちの学習の様子です．チャボを育ててきた子どもたちがこんなふうに書いています．

> 食べていいよ　ボブル．たまごばかりあたためていなくて，えさも食べなよ．
> おなかすいてない？
> そっか！一生けんめいでえさを食べる時間ないのか．
> よしっ．わたしがえさを近づけるね．
> たくさん食べてひなをたくさん生んでね．

子どもたちがちゃぼの立場になりながら一生懸命に考えています．３行目の「そっか！」というところで，子どもたちは気付くわけです．どうして食べなかったのかと不思議に思っていたこの子は，「そっか！」と，その理由に気付いたわけです．あまりに一生懸命に卵を温めているから食べてる暇なんてないんだな．と子どもは思うわけです．子どもにしてみれば，あんなに一生懸命餌を食べていたチャボが急に餌を食べなくなっておかしいなと思ったのかもしれません．この子は，それまでの二つの場面を比較して考えて，それぞれの一生懸命である理由に気付いたのでしょう．

このように，子どもたちは動物が一生懸命に命を育んでいるということを，子どもなりに考えているのです．この文章の中にも，子どもたちが真剣に考えている姿が表れていると思います．

そして子どもは「よしっ．わたしがえさをちかづけるね．」と書くわけです．「わたし」が行動をしよう．と，新たな行動に移るわけです．この子どもの文章を読んでいるだけでも，相手の立場になって考えて，自分から行動しようとする気持ちが芽生えてきたことがわかります．そして，それが子どもの感性をベースにしているということもわかります．

その次の子どもの姿を紹介しましょう．これは，中型の動物を飼ったときの子どもの様子です．

> ぼくじょうをつくるとき，くぎをうつのに力がいるのでたいへんでした．ぼくじょうづくりは，とてもたんへんなしごとだとおもいます．こやそうじもたいへんでした．わたしはこやそうじのときちょっとくさかったけどがまんしました．
> ぼくじょうをつくることもこやそうじをするのもとてもたいへんでした．でも，みんなで力をあわせてやりました．たいねんなしごともやりました．そうしたら，りっぱなさくができました．こやもきれいになりました．

子どもたちが全身で感じ取っている姿，目で見たり耳で聞いたり肌で感じたりしながらいろいろなことを感じ取っています．動物を飼育する中で，

自分一人ではなく力を合わせたり協力したりすること，そして，何にもまして大きな責任を負って仕事をしているんだということを考えている姿が，この文章の中に見えると思います．

さて，生活科については全面実施になってから15年くらい経っているわけですが，その中で，子どもたちが動物飼育のことについてどのように考えているのか，学会の調査の結果がありますので，ご紹介したいと思います．小学校３年生，６年生，中学生，高校生など，約2500名を対象とした調査の結果です．生活科に対しては，多くが好意的で，生活科は楽しい，好きだと言っているわけですが，その中で，心に残る生活科の活動というものを調べてみました．もっとも心に残っているものは，このグラフの15番になります．15番はどういう設問かといいますと，「アサガオやチューリップやミニトマトなどを育てた」というものです．その次は１番です．１番は「校内のいろいろな場所を探検したり，先生など学校で働いている人と話をした」というものです．その次に多いのが，２番です．「通学路や学校の周りを歩いたり，近くの公園や野原などに出かけたりした」というもので，これらがベスト３ということになります．４番目が14番の設問です．「ザリガニやコオロギを捕まえたり，ウサギやチャボなどの小動物の世話をして遊んだ」というものです．

このように見ていきますと，全部で19ある設問のうち，４番目に動物飼育に関する項目が出てきます．動物の飼育に関しては，印象に残っているということが言えると思います．

この調査の中では，生活科で身に付いた力ということに関しても調査しています．20ほどある設問の中で，生活科でどのようなことが身に付いたかということについて聞いていますが，一番多いのは１番で，「動物を飼ったり植物を育てたりするなど，生きものに親しむことができるようになった」というものです．２番目は17番で，「自分の得意なところや友だちの良いところに気づくことができるようになった」というものです．この辺も，動物の飼育に関係あるのではないでしょうか．その次に多いのが12番です．これは，「みんなで一つのことをする楽しさを知り，協力することができるようになった」というものです．これも，動物飼育などに関係があるのではないでしょうか．子どもたち一人だけではなくて，クラスみんなで力を合わせたり，協力したり，助け合ったりする場面が出てくるのが動物飼育ではないかと思います．

調査結果を見てみますと，子どもたちの印象に残っているものとして，動物飼育がありますし，実際に身に付いたということの中にも動物飼育というものが大きな影響を与えているということが言えると思います．動物を飼育することの価値が，この学会の調査にはっきりと見えてきたのではないかと思います．

こういった調査は他にもしておりまして，文部科学省で，質問紙調査をしています．先ほどの学会のアンケートは子どもたちに聞いたものですが，これは先生方に聞いている調査です．生活科の中の８つの内容の中で，子どもたちはどの内容に関心をもっていて，実際にどの程度内容が実現されているか，ということについて調べたものです．左側が関心の，右側が内容実現のグラフです．ブルーが肯定的な意見で，レッドが否定的な意見です．左側の関心のグラフの中で，(7)（動物飼育に関すること）については，子どもたちにとって関心のもちやすいものであると先生方は思っているという結果になりました．そして，右側の内容として子どもたちに身に付いているかということについては，ある程度高いわけですが，関心の項目と比べると，まだ十分ではないという結果も出てきていることがわかると思います．ですから，子どもたちは動物飼育に関して，高い関心を示すのですが，さきほどの事例のような子どもの姿として内容がしっかりと身に付くかということについては，また別の問題があるということが言えると思います．

さらに，このようなことに関して，指定校を設定して詳細なところを調査しています．全国の５つの学校で重点的に研究していただいてデータを集めたものですが，それぞれの学校の内容別の時間を見てみますと，やはり内容の(7)，動物飼育に関する部分が時間数としても最も多い結果となっています．各学校では年間指導計画をつくっていますが，その時間数をカウントして出したものです．したがって，(7)の内容は，生活科の中では非常に多くの時間を費やして，重視されているということになります．ただし，(7)の内容の中で，動物の飼育と植物の栽培というものを仕分けてみますと，やはり，植物の栽培の方が多い結果となっています．大まかにいうと，７（植物栽培）：３（動物飼育）程度の割合になっているようです．ただ，必ずしもこれらを別々に行っているというわけではなくて，両方同時に行っている学校もありますので，きちんと分かれるわけではないのですが，傾向があるということです．

そんな中で，先ほどの指定校５校の中で，子どもたちの学習状況を，Ａ，Ｂ，Ｃと３段階で評価していただきました．これは各学校で行っている評価規準によって行ったもので，Ａが多いほど良いということになります．このグラフの中のブルーが「関心・意欲・態度」で，ワインレッドのと